

図書館員の四季

石の上3年たてば次の石

済生会泉尾病院 松田 智恵子

「石の上3年たてば次の石」は好きなサラリーマン川柳のひとつである。(座右の銘？ではないけれど) コジツケかもしれないが、病院機能評価の考え方に共通しているところがあるように思える。

昨年10月全国図書室研究会に出席し、日本医療機能評価機構のサーベイヤーの方(7年間米滞在)の講演を聞く機会に恵まれた。

そのお話によるとアメリカではすでに20年の歴史があり、日本ではまだ5年しか経っていないがその目的はまず「病院をよくすること」にあるので、とりあえず一度受けてみて評価が低ければ、評価が上がるように一層の努力をし3年ぐらい経って再度受ければよい。

そして3年前に比べてどんなところが改善されたか？またこれから3年後の目標をどのように実現に結びつけてゆくか？などと二度三度と受けて評価を上げてゆき、どんどん病院を良くしていけばよい。これまではこうだったけど、これからはこういう風にしましょう！・・・etc.

わが(?)図書室も6年前には埃だらけの古本の山にすぎなかった。「石の上にも3年」とばかり忍の一字の図書室員であったが、努力の結果3年後、6年後と省みれば成果としてかなり改善されてきており、7年目の今これから3年後の目標に向かって、さらに創意工夫をし図書室の機能充実を目指してガンバッテいきたいと思う。

そこで一句「石の上6年たっても次の石」となるのである???。

四季が高速度で

大阪警察病院 井上 浩美

最近、特に体面積が気になってきました。30歳を過ぎた頃より自分の影がやけに大きく感じられ、中でも下半身や二の腕はすでに子どもを何人か育てたかのように遅しく、がちりしてきました。なんだかとっても、この図書・病歴という仕事向きの体型になってきたようで複雑な気分です。

思えば早いもので、図書の仕事を担当するようになってから9年目に入り、足腰も鍛えられるはずだと変に納得すると同時に、新人時代の関節の痛みが遠い思い出になりつつあるようです。図書の仕事に就いた当初、体力に始まり体力で終わることを身をもって知らされ、「好きな本に囲まれた優雅なお仕事」のイメージが、一瞬にして崩れ去ってしまった記憶があります。

最近では、机上での作業が幾分増えたとはいえ、紙のカタマリ(愛読書ではないため、カタマリに見える)はまだまだ私たちの体をこき使い鍛えてくれます。そして、あんなに静かに本の持ち運びをしていた新人時代に比べて、今では「ヨイショ!」「ドッコイショ!」「せーの!」といちいち移動時に掛け声を人前でも平気で口にする自分に遅さと恥ずかしさを感じます。

春と共に製本の時期がやって来ます。春のウレシサと、製本の重たさに気持ちはすでに秋の空。一働きをした後の暑い汗と、やれどもやれども片付かぬ本を相手に冷たい冬の冷や汗。四季が高速度で身体を巡ります。こんなところにも図書館員の四季がありました。